

お律と子等と

芥川龍之介

青空文庫

一

雨降りしゅうの午後、今年中学を卒業した洋一よういちは、二階の机に背を円まるくしながら、北原きたはらはく白秋しやく風の歌を作っていた。すると「おい」と云う父の声が、突然彼の耳を驚かした。彼は倉皇そうこうと振り返る暇にも、ちようどそこにあつた辞書の下に、歌稿を隠す事を忘れなかつた。が、幸い父の賢造けんぞうは、夏外套なつがいうとうをひっかけたまま、うす暗い梯子はしごの上り口へ胸まで覗のぞかせているだけだつた。

「どうもお律りつの容態ようたいが思わしくないから、慎太郎しんたろうの所へ電報を打つてくれ。」

「そんなに悪いの？」

洋一は思わず大きな声を出した。

「まあ、ふだんが達者だから、急にどうと云う事もあるまいがね、——慎太郎へだけ知らせた方が——」

洋一は父の言葉を奪つた。

「戸沢とざわさんは何だつて云うんです？」

「やつぱり十二指腸の潰瘍だそうだ。——心配はなからうって云うんだが。」

賢造は妙に洋一と、視線の合う事を避けたいらしかった。

「しかしあしたは谷村博士たにむらはかせに来て貰うように頼んで置いた。戸沢さんもそう云うから、

——じゃ慎太郎の所を頼んだよ。宿所はお前が知っているね。」

「ええ、知っています。——お父さんはどこかへ行くの？」

「ちよいと銀行へ行つて来る。——ああ、下に浅川あさかわの叔母さんおばが来ているぜ。」

賢造の姿が隠れると、洋一には外の雨の音が、急に高くなつたような心もちがした。愚ぐ図ず愚ずしている場合じゃない——そんな事もつきり感じられた。彼はすぐに立ち上ると、真しんちゆう鍬くわの手すりに手を触れながら、どしどし梯子はしごを下りて行つた。

まつすぐに梯子を下りた所が、ぎつしり右左の棚の上に、メリヤス類のボオル箱を並べた、手広い店になっている。——その店先の雨明りの中に、パナマ帽をかぶつた賢造は、こちらへ後うしろを向けたまま、もう入口に直した足駄あしだへ、片足下している所だった。

「旦那だんな。工場こうばから電話です。今日きょうあちらへ御見えになりますか、伺つてくれると申すんですが………」

洋一が店へ来ると同時に、電話に向つていた店員が、こう賢造の方へ声をかけた。店員

はほかにも四五人、金庫の前や神棚の下に、主人を送り出すと云うよりは、むしろ主人の出て行くのを待ちでもするような顔をしていた。

「きようは行けない。あした行きますってそう云つてくれ。」

電話の切れるのが合図あいずだったように、賢造は大きな洋傘こうもりを開くと、さつきと往来へ歩き出した。その姿がちよいとの間、浅く泥を刷はいたアスファルトの上に、かすかな影を落して行くのが見えた。

「神山かみやまさんはいないのかい？」

洋一は帳場机に坐りながら、店員の一人の顔を見上げた。

「さつき、何だか奥の使いに行きました。——良りようさん。どこだか知らないかい？」

「神山さんか？ I don't know ですな。」

そう答えた店員は、上り框がまちにしゃがんだまま、あとは口笛を鳴らし始めた。

その間に洋一は、そこにあった頼信紙へ、せっせと万年筆を動かしていた。ある地方の高等学校へ、去年の秋入学した兄、——彼よりも色の黒い、彼よりも肥ふとった兄の顔が、彼には今も頭のどこかに、ありあり浮んで見えるような気がした。「ハハワルシ、スグカエレ」——彼は始はじめこう書いたが、すぐにまた紙を裂さいて、「ハハビヨウキ、スグカエレ」と

書き直した。それでも「ワルシ」と書いた事が、何か不吉な前兆ぜんちようのように、頭にこびりついて離れなかった。

「おい、ちよいとこれを打つて来てくれないか？」

やつと書き上げた電報を店員の一人に渡した後のち、洋一は書き損じた紙を噛み噛み、店の後うしろにある台所へ抜けて、晴れた日も薄暗い茶の間まへ行つた。茶の間には長火鉢の上の柱に、ある毛糸屋の広告を兼ねた、大きな日曆ひじよみが懸つている。——そこに髪を切つた浅川の叔母が、しきりと耳搔みみかきを使いながら、忘れられたように坐つていた。それが洋一の足音を聞くと、やはり耳搔みみかきを当てがつたまま、始終ただ爛れてゐる眼を擡もたげた。

「今日は。お父さんはもうお出かけかえ？」

「ええ、今し方。——お母さんにも困りましたね。」

「困つたねえ、私は何も名のつくような病氣じゃないと思つていたんだよ。」

洋一は長火鉢の向うに、いやいや落着かない膝ひざを据えた。襖ふすま一つ隔てた向うには、大病の母が横になつている。——そう云う意識がいつもよりも、一層この昔風な老人の相手を苛いらだ立たしいものにさせるのだつた。叔母はしばらく黙つていたが、やがて額で彼を見ながら、

「お絹ちゃんきぬが今来るとき。」と云った。

「姉さんはまだ病氣じゃないの？」

「もう今日は好いんだとき。何、またいつもの鼻かぜつ風邪だったんだよ。」

浅川の叔母の言葉には、軽い侮蔑ぶべつを帯びた中に、反かえって親しそうな調子があつた。三人きょうだいがある内でも、お律りつの腹を痛めないお絹が、一番叔母には気に入らしい。それには賢造の先妻が、叔母の身内みうちだと云う理由もある。——洋一は誰かに聞かされた、そんな話を思い出しながら、しばらくの間あいだは不承不承ふしょうふしょうに、一昨いっさくねん年ある呉服屋へ縁づいた、病氣勝ちな姉あねの噂うわさをしていた。

「憤しんちゃんの所はどうおしだえ？ お父さんは知らせた方が好いいとか云つてお出でだったけれど。」

その噂が一段落着いた時、叔母は耳搔かききの手をやめると、思い出したようにこう云った。
「今、電報を打たせました。今日中きょうちゆうにやまさか届くでしょう。」

「そうだねえ。何も京大阪と云うんじやあるまいし、——」

地理に通じない叔母の返事は、心細こまいくらい曖昧あいまいだった。それが何故なぜか唐突と、洋一の内に潜ひそんでいたある不安を呼び醒ました。兄は帰つて来るだろうか？——そう思うと彼

は電報に、もつと大^{おおぎよう}仰な文句を書いても、好かつたような気が出した。母は兄に会いたがっている。が、兄は帰つて来ない。その内に母は死んでしまう。すると姉や浅川の叔母が、親不孝だと云つて兄を責める。——こんな光景も一瞬間、はつきり眼の前に見えるような気がした。

「今日届けば、あしたは帰りますよ。」

洋一はいつか叔母よりも、彼自身に気休めを云い聞かせていた。

そこへちようど店の神山^{かみやま}が、汗ばんだ額^{ひたい}を光らせながら、足音を偷^{ぬす}むようにはいつて来た。なるほどどこかへ行つた事は、袖^{そで}に雨^{あま}じみの残っている縞^{しまろ}縞の羽織にも明らかだつた。

「行つて参りました。どうも案外待たされてな。」

神山は浅川の叔母に一礼してから、懷^{ふところ}に入れて来た封書を出した。

「御病人の方は、少しも御心配には及ばないとか申して居りました。追つていろいろ詳しい事は、その中に書いてありますそうで——」

叔母はその封書を開く前に、まず度^どの強そうな眼鏡^{めがね}をかけた。封筒の中には手紙のほかにも、半紙に一の字を引いたのが、四つ折のままはいつていた。

「どこ？ 神山さん、この太極堂たいきよくどうと云うのは。」

洋一よういちはそれでも珍しそうに、叔母の読んでいる手紙を覗きこんだ。

「二町目の角に洋食屋がありましょう。あの露路ろじをはいった左側です。」

「じゃ君の清元きよもとの御師匠さんの近所じゃないか？」

「ええ、まあそんな見当です。」

神山はにやにや笑いながら、時計の紐ひもをぶら下げた瑪瑙めのうの印形いんぎようをいじっていた。

「あんな所に占うらい者ななんぞがあつたかしら。——御病人は南枕みなみまくらにせらるべく候か。」

「お母さんはどっち枕まくらだえ？」

叔母は半ばたしなめるように、老眼鏡の眼を洋一へ挙げた。

「東枕ひがしまくらでしょう。この方角が南だから。」

多少心もちの明あかるくなった洋一は、顔は叔母の方へ近づけたまま、手は袂たもとの底にある巻煙草の箱を探っていた。

「そら、そこに東枕にてもよろしいと書いてありますよ。——神山さん。一本上げようか？ 抛ほうるよ。失敬。」

「こりやどうも。E・C・Cですな。じゃ一本頂きます——。もうほかに御用はございま

せんか？　もしまたございましたら、御遠慮なく——」

神山は金口きんぐちを耳みみに挟はさみながら、急に夏羽織なつばりの腰こしを擡もたげて、そうそう々店の方へ退こうとした。その途端に障子が明くと、頸くびに湿布しつぷを巻いた姉のお絹きぬが、まだセルのコオトも脱くだもがず、果物の籠かごを下くだげてはいって来た。

「おや、お出でなさい。」

「降りますのによくまた、——」

そう云う言葉が、ほとんど同時に、叔母と神山との口から出た。お絹は二人に会え釈しやくをしながら、手早くコオトを脱ぎ捨てると、がっかりしたように横よこ坐ざりになった。その間あいだに神山は、彼女の手から受け取った果物の籠かごをそこへ残して、気忙きせわしそうに茶の間を出て行いった。果物の籠かごには青林檎あおりんごやバナナが綺麗きれいにつやつやと並んでいた。

「どう？　お母さんは。——御免なさいよ。電車がそりやこむもんだから。」

お絹はやはり横坐りのまま、器用に泥だらけの白足袋しろたびを脱いだ。洋一はその足袋を見ると、丸鬚まるまげに結ゆった姉の身のまわりに、まだ往来の雨のしぶきが、感ぜられるような心もちがした。

「やつぱりお肚なかが痛むんでねえ。——熱もまだ九度くどからあるんだとき。」

叔母は易者えきしやの手紙をひろげたなり、神山と入れ違いに來た女中の美津みつと、茶を入れる仕度いそがに忙しかった。

「あら、だつて電話じや、昨日きのうより大変好きそうだったじやありませんか？ もつとも私
は出なかつたんですけれど、——誰？ 今日電話をかけたのは。——洋ちゃん？」

「いいえ、僕じやない。神山さんじやないか？」

「さようでございます。」

これは美津みつが茶すずを勧めながら、そつとつけ加えた言葉だった。

「神山さん？」

お絹ははすはに顔をしかめて、長火鉢の側へすり寄つた。

「何だねえ。そんな顔をして。——お前さんの所はみんな御達者かえ？」

「ええ、おかげ様で、——叔母さんの所でも皆さん御丈夫ですか？」

そんな對話を聞きながら、巻煙草を啣くわえた洋一は、ぼんやり柱はしら暦こよみを眺めていた。中学を卒業して以来、彼には何日なんにちと云う記憶はあつても、何曜日かは終始忘れている。——それがふと彼の心に、寂しい気もちを与えたのだった。その上もう一月すると、ほとんど受ける気のしない入学試験がやって来る。入学試験に及第しなかつたら、………

「美津がこの頃は、大へん女ぶりを上げたわね。」

姉の言葉が洋一には、急にはつきり聞えたような気がした。が、彼は何も云わずに、金^き口^{くち}をふかしているばかりだった。もつとも美津はその時にはどうにももう台所^{さか}へ下つていた。

「それにあの人は何と云つても、男好きのする顔だから、——」

叔母はやつと膝の上の手紙や老眼鏡を片づけながら、蔑^{さげす}むらしい笑いかたをした。するとお絹も妙な眼をしたが、これはすぐに気を変えて、

「何？ 叔母さん、それは。」と云つた。

「今神山さんに墨^{すみ}色^{いろ}を見て来て貰つたんだよ。——洋ちゃん、ちよいとお母さんを見て来ておくれ。さつきよく休んでお出でだったけれど、——」

ひどく厭な気がしていた彼は金口を灰に突き刺すが早いか、叔母や姉の視線を逃れるように、早速長火鉢の前から立ち上つた。そうして襖^{ふすま}一つ向うの座敷へ、わざと気軽そうにはいつて行つた。

そこは突き当りの硝子障子^{ガラスしょうじ}の外^{そと}に、狭い中庭を透^すかせていた。中庭には太い冬青^{もみぢ}の樹が一本、手水鉢^{ちようずばち}に臨んでいるだけだった。麻の搔^か卷^{まき}をかけたお律^{りつ}は氷^{ひよう}囊^うを頭に載

せたまま、あちら向きにじつと横になっていた。そのまた枕もとには看護婦が一人、膝の上にひろげた病床日誌へ近眼の顔をすりつけるように、せつせと万年筆を動かしていた。

看護婦は洋一の姿を見ると、ちよいと媚こびのある目礼をした。洋一はその看護婦にも、はつきり異性を感じながら、妙に無愛想ぶあいそうな会釈えしやくを返した。それから蒲団ふとんの裾すそをまわつて、母の顔がよく見える方へ坐つた。

お律は眼をつぶっていた。生来薄手うすでに出来た顔が一層今日は寡やつれたようだった。が、洋一の差し覗のぞいた顔へそつと熱のある眼をあけると、ふだんの通りかすかに頬笑ほほえんで見せた。洋一は何だか叔母や姉と、いつまでも茶の間に話ましていた事がすまないような心もちになつた。お律はしばらく黙もくつていてから、

「あのね」とさも大儀たいぎそうに云つた。

洋一はただ頷うなずいて見せた。その間も母の熱臭いのがやはり彼には不快だった。しかしお律はそう云つたぎり、何とも後あとを続けなかつた。洋一はそろそろ不安になつた。遺言ゆいごん、

——と云う考えも頭へ来た。

「浅川の叔母さんはまだいるでしょう？」

やつと母は口を開いた。

「叔母さんもいるし、——今し方姉さんも来た。」

「叔母さんにね、——」

「叔母さんに用があるの？」

「いいえ、叔母さんに梅川うめがわの鰻うなぎをとって上げるの。」

今度は洋一が微笑した。

「美津にそう云つてね。好いかい？——それでおしまい。」

お律はこう云い終ると、頭の位置を変えようとした。その拍子に氷ひょうのう嚢ふくろが迂り落ちた。洋一は看護婦の手を借りずに、元通りそれを置き直した。するとなぜか眶まぶたの裏が突然熱くなるような気がした。「泣いちやいけない。」——彼は咄嗟とつさにそう思った。が、もうその

時は小鼻の上に涙のたまるのを感じていた。

「莫迦ばかだね。」

母はかすかに呟つぶやいたまま、疲れたようにまた眼をつぶった。

顔を赤くした洋一は、看護婦の見る眼を恥じながら、すすろ茶の間まへ帰つて来た。帰つて来ると浅川の叔母おばが、肩越しに彼の顔を見上げて、

「どうだえ？ お母さんは。」と声をかけた。

「目がさめています。」

「目はさめているけれどさ。」

叔母はお絹と長火鉢越しに、顔を見合せたらしかった。姉は上眼うわめを使いながら、筭かんざしで鬚しげの根を搔かいていたが、やがてその手を火鉢へやると、

「神山さんが帰って来た事は云わなかったの？」と云った。

「云わない。姉さんが行つて云うと好いや。」

洋一は襖ふすま側ぎわに立ったなり、緩ゆるんだ帯をしめ直していた。どんな事があってもお母さんを死なせてはならない。どんな事があっても——そう一心に思いつめながら、………

二

翌日あくるひの朝洋一よういちは父と茶の間の食卓まに向つた。食卓の上には、昨夜泊ゆうべつた叔母おばの茶碗も伏せてあつた。が、叔母は看護婦が、長い身じまいをすませる間あいだ、母の側へその代りに行つてゐるとか云う事だつた。

親子は箸はしを動かしながら、時々短い口を利きいた。この一週間ばかりと云うものは、毎日

こう云う二人きりの、寂しい食事が続いている。しかし今日はいつもよりは、一層二人とも口が重かった。給仕の美津も無言のまま、盆をさし出すばかりだった。

「今日は慎太郎が帰つて来るかな。」

賢造は返事を予期するように、ちらりと洋一の顔を眺めた。が、洋一は黙っていた。兄が今日帰るか帰らないか、——と云うより一体帰るかどうか、彼には今も兄の意志が、どうも不確かでないのだった。

「それとも明日の朝になるか？」

今度は洋一も父の言葉に、答えない訳には行かなかった。

「しかし今は学校がちょうど、試験じやないかと思うんですがね。」

「そうか。」

賢造は何か考えるように、ちよいと言葉を途切らせたが、やがて美津に茶をつがせながら、

「お前も勉強しなくっちゃいけないぜ。慎太郎はもうこの秋は、大学生になるんだから。」と云った。

洋一は飯を代えながら、何とも返事をしなかった。やりたい文学もやらせずに、勉強ば

かり強いこの頃の父が、急に面憎つらにくくなったのだった。その上兄が大学生になると云う事は、弟が勉強すると云う事と、何も関係などはありはしない。——そうまた父の論理の矛盾むじゆんを嘲笑あざわらう気もちもないではなかった。

「お絹きぬは今日は来ないのかい？」

賢造はすぐに気を変えて云った。

「来るそうです。が、とにかく戸沢とさわさんが来たら、電話をかけてくれって云っていました。」

「お絹の所でも大変だろう。今度はあすこも買った方だから。」

「やつぱりちつとはすったかしら。」

洋一ももう茶を飲んでいた。この四月以来市場しじようには、前代未聞ぜんだいみもんだと云う恐慌きようこうが来ている。現に賢造の店などでも、かなり手広くやっていた、ある大阪の同業者が突然破産したために、最近も代払だいばらいの厄に遇った。そのほかまだ何だ彼かだといろいろな打撃を通算したら、少くとも三万円内外は損失を蒙こうむっているのに相違ない。——そんな事も洋一は、小耳に挟んでいたのだった。

「ちつとやそつとでいてくれりや好いいが、——何しろこう云う景気じゃ、いつ何時なんどきうち

なんでも、どんな事になるか知れないんだから、——」

賢造は半ば冗談のように、心細い事を云いながら、大儀そうに食卓の前を離れた。それから隔ての襖を明けると、隣の病室へはいって行つた。

「ソップも牛乳もおさまった？ そりや今日は大出来だね。まあ精々食べるようにならなくつちやいけない。」

「これで薬さえ通ると好いんですが、薬はすぐに吐いてしまふんでね。」

こう云う会話も耳へはいつた。今朝は食事前に彼が行つて見ると、母は昨日一昨日よりも、ずっと熱が低くなつていた。口を利くのもはきはきしていれば、寝返りをするのも楽しそうだった。「お肚はまだ痛むけれど、気分は大へん好くなったよ。——母自身もそう云つていた。その上あんなに食気までついたようでは、今まで心配していたよりも、存外恢復は容易かも知れない。——洋一は隣を覗きながら、そう云う嬉しさにそやされていた。が、余り虫の好い希望を抱き過ぎると、反つてそのために母の病気が悪くなつて来はしないかと云う、迷信じみた惧れも多少はあつた。」

「若旦那様、御電話でございます。」

洋一はやはり手をついたまま、声のする方を振り返つた。美津は袂を唧えながら、食卓

に布巾ふきんをかけていた。電話を知らせたのはもう一人の、松まつと云う年上の女中だった。松は濡れ手を下げたなり、銅壺どうこの見える台所の口に、襷たすき掛けの姿を現していた。

「どこだい？」

「どちらでございますか、——」

「しょうがないな、いつでもどちらでございますかだ。」

洋一は不服そうに呟つぶきながら、すぐに茶の間まを出て行った。おとなしい美津に負け嫌いの松の悪口あつこうを聞かせるのが、彼には何となく愉快なような心もちも働いていたのだった。店の電話に向つて見ると、さきは一しよに中学を出た、田村たむらと云う藥屋の息子だった。

「今日ね。一しよに明治座めいじざを覗かないか？ 井上だよ。井上なら行くだろう？」

「僕は駄目だよ。お袋が病氣なんだから——」

「そうか。そりや失敬した。だが残念だね。昨日堀ほりや何かは行つて見たんだつて。——」

そんな話を話し合つた後のち、電話を切つた洋一は、そこからすぐに梯子はしごを上つて、例の通り二階の勉強部屋へ行つた。が、机に向つて見ても、受験の準備は云うまでもなく、小説を読む気さえ起らなかった。机の前には格子窓こうしまどがある、——その窓から外を見ると、向うの玩具問屋おもちゃどんやの前に、半天着はんてんぎの男が自転車はんてんぎのタイヤへ、ポンプの空気を押しこんでい

た。何だかそれが洋一には、^{きげわ}氣忙しそうな氣がして不快だった。と云つてまた下へ下りて行くのも、やはり氣が進まなかった。彼はとうとう机の下の漢和辞書を枕にしながら、ごろりと畳に寝ころんでしまった。

すると彼の心には、この春以来顔を見ない、彼には父が違っている、兄の事が浮んで来た。彼には父が違っている、——しかしそのために洋一は、一度でも兄に対する情が、^{じょう}世間普通の兄弟に變つていると思つた事はなかった。いや、母が兄をつれて再縁したと云う事さえ、彼が知るようになったのは、割合に新しい事だった。ただ父が違っていると云えば、彼にはかなりはつきりと、こんな思い出が残っている。——

それはまだ兄や彼が、小学校にいる時分だった。洋一はある日愼太郎と、トランプの勝敗から口論をした。その時分から冷静な兄は、彼がいくらいきり立つても、ほとんど語氣さえも荒立てなかった。が、時々蔑む^{さげす}ようにじろじろ彼の顔を見ながら、一々彼をきめつけて行つた。洋一はとうとうかつとなつて、そこにあつたトランプを掴^{つか}むが早いか、いきなり兄の顔へ叩きつけた。トランプは兄の横顔に中^{あた}つて、一面にあたりへ散乱した。——
と思うと兄の手が、ぴしやりと彼の頬を撲^ぶつた。

「生意氣な事をするな。
^{なまいき}」

そう云う兄の声の下から、洋一は兄にかぶりついた。兄は彼に比べると、遙に体も大きかった。しかし彼は兄よりもがむしやらな所に強味があつた。二人はしばらく獣けもののように、撲なぐつたり撲られたりし合っていた。

その騒ぎを聞いた母は、慌ててその座敷へはいって来た。

「何をするんです？ お前たちは。」

母の声を聞か聞かない内に、洋一はもう泣き出していた。が、兄は眼を伏せたまま、むつとり佇たつずんでいるだけだつた。

「慎太郎。お前は兄さんじゃないか？ 弟を相手に喧嘩けんかなんぞして、何がお前は面白いんだえ？」

母にこう叱られると、兄はさすがに震え声だつたが、それでも突かかるように返事をした。

「洋一が悪いんです。さきに僕の顔へトランプを叩きつけたんだもの。」

「嘘つき。兄さんがさきに撲ぶつたんだい。」

洋一は一生懸命に泣き声で兄に反対した。

「ずるをしたのも兄さんだい。」

「何。」

兄はまた擬勢ぎせいを見せて、一足彼の方へ進もうとした。

「それだから喧嘩になるんじゃないか？ 一体お前が年嵩としかさな癖くせに勘弁かんべんしてやらないのが悪いんです。」

母は洋一をかばいながら、小突くように兄を引き離れた。すると兄の眼の色が、急に無ぶ気味きみなほど陰しくなった。

「好いやい。」

兄はそう云うより早く、氣違ひのように母を撲ぶとうとした。が、その手がまだ振り下されない内に、洋一よりも大声に泣き出してしまった。――

母がその時どんな顔をしていたか、それは洋一の記憶になかった。しかし兄の口惜くやしそうな眼つきは、今でもまざまざと見えるような気がする。兄はただ母に叱られたのが、癩か癩しやくに障さわつただけかも知れない。もう一步臆測おくそくを逞たくましくするのは、善くない事だと云う心もちもある。が、兄が地方へ行つて以来、ふとあの眼つきを思い出すと、洋一は兄の見たる母が、どうも彼の見ている母とは、違つていそうに思われるのだった。しかもそう云う気がし出したのには、もう一つ別な記憶もある。――

三年前の九月、兄が地方の高等学校へ、明日立とうと云う前日だった。洋一は兄と買物をしに、わざわざ銀座まで出かけて行つた。

「当分大時計とも絶縁だな。」

兄は尾張町の角へ出ると、半ば独り言のようにこう云つた。

「だから一高へはいりや好いのに。」

「一高へなんぞちつともはいりたくはない。」

「負惜しみばかり云つていらあ。田舎へ行けば不便だぜ。アイスクリームはなし、活動写

真はなし、——」

洋一は顔を汗ばませながら、まだ冗談のような調子で話し続けた。

「それから誰か病氣になつても、急には帰つて来られないし、——」

「そんな事は当り前だ。」

「じゃお母さんでも死んだら、どうする？」

歩道の端を歩いていた兄は、彼の言葉に答える前に、手を伸ばして柳の葉をむしつた。

「僕はお母さんが死んでも悲しくない。」

「嘘つき。」

洋一は少し昂奮こうふんして云った。

「悲しくなかつたら、どうかしていらあ。」

「嘘じゃない。」

兄の声には意外なくらい、感情の罩こもった調子があつた。

「お前はいつでも小説なんぞ読んでいるじゃないか？ それなら、僕のような人間のある事も、すぐに理解出来そうなもんだ。——可笑おかしな奴だな。」

洋一は内心ぎよつとした。と同時にあの眼つきが、——母を撲ぶとうとした兄の眼つきが、はつきり記憶に浮ぶのを感じた。が、そつと兄の容ようす子を見ると、兄は遠くへ眼をやりながら、何事もないように歩いていた。——

そんな事を考えると、兄がすぐに帰つて来るかどうか、いよいよ怪しい心もちがする。殊に試験でも始まつていれば、二日や三日遅れる事は、何とも思っていないかも知れない。遅れてもとにかく帰つて来れば好いが、——彼の考がそこまで来た時、誰かの梯子はしごを上つて来る音が、みしりみしり耳へはいり出した。洋一はすぐに飛び起きた。

すると梯子の上り口あがぐちには、もう眼の悪い浅川の叔母おばが、前屈まえかがみの上半身を現わしていた。

「おや、昼寝かえ。」

洋一はそう云う叔母の言葉に、かすかな皮肉を感じながら、自分の座蒲団ざぶとんを向うへ直した。が、叔母はそれは敷かずに、机の側へ腰を据えると、さも大事件でも起つたように、小さな声で話し出した。

「私は少しお前に相談があるんだがね。」

洋一は胸がどきりとした。

「お母さんがどうかしたの？」

「いいえ、お母さんの事じゃないんだよ。実はあの看護婦だがね、ありやお前、仕方がないよ。——」

叔母はそれからねちねちと、こんな話をし始めた。——昨日あの看護婦は、戸沢とやわさんが診察に来た時、わざわざ医者茶の間へ呼んで、「先生、一体この患者かんじゃはいつ頃まで持つ御見込みなんでしょう？　もし長く持つようでしたら、私はお暇を頂きたいんですが。」と云った。看護婦は勿論医者ほかに、誰もいないつもりに違いなかった。が、生憎あいにく台所にいた松がみんなそれを聞いてしまった。そうしてぷりぷり怒りながら、浅川の叔母に話して聞かせた。のみならず叔母が気をつけていると、その後も看護婦の所置ぶりには、

不親切な所がいろいろある。現に今朝^{けさ}なぞも病人にはかまわず、一時間もお化粧^{けしやう}にかかっていた。……

「いくら商売柄だつて、それじゃお前、あんまりじゃないか。だから私の量^{りやうけん}見^{けん}じゃ、取り換えた方が好いだろうと思うのさ。」

「ええ、そりやその方が好いでしょう。お父さんにそう云つて、——」

洋一はあんな看護婦なぞに、母の死期^{しき}を数えられたと思うと、腹が立つて来るよりも、^{かえ}反つて気がふさいでならないのだつた。

「それがさ。お父さんは今し方、工場^{こうば}の方へ行つてしまつたんだよ。私がまたどうしたんだか、話し忘れてゐる内にさ。」

叔母はややもどかしそうに、爛^{ただ}れてゐる眼を大きくした。

「私はどうせ取り換えるんなら、早い方が好いと思うんだがね、——」

「それじゃあ神山さんにそう云つて、今すぐに看護婦会へ電話をかけて貰いましょうよ。」

——お父さんにや歸つて来てから話しさえすれば好いんだから、——

「そうだね。じゃそうして貰おうかね。」

洋一は叔母のさきに立つて、勢い好く梯子を走り下りた。

「神山さん。ちよいと看護婦会へ電話をかけてくれ給え。」

彼の声を聞いた五六人の店員たちは、店先に散らばった商品の中から、驚いたような視線を洋一に集めた。と同時に神山は、派手なセルの前掛けに毛糸屑をくつつけたまま、早速帳場机から飛び出して来た。

「看護婦会は何番でしたかな？」

「僕は君が知っていると思った。」

梯子の下に立った洋一は、神山と一しよに電話帳を見ながら、彼や叔母とは没交渉な、平日と変らない店の空気に、軽い反感のようなものを感じない訳には行かなかった。

三

午過ぎになつてから、洋一が何気なく茶の間へ来ると、そこには今し方帰つたらしい、夏羽織を着た父の賢造が、長火鉢の前に坐っていた。そうしてその前には姉のお絹が、火鉢の縁に肘をやりながら、今日は湿布を巻いていない、綺麗な丸髷の襟足をこちらへまともに露していた。

「そりやおれだつて忘れるもんかな。」

「じゃそうして頂戴よ。」

お絹は昨日きのうよりもまた一倍、血色の悪い顔を挙げて、ちよいと洋一の挨拶あいさつに答えた。それから多少彼を憚はばかのような、薄笑いを含んだ調子で、怯おず怯おず話の後あとを続けた。

「その方ほうがどうかなくなってくれなくつちや、何かに私だつて気がひけるわ。私があの時何した株なんぞも、みんな今度は下つてしまつたし、——」

「よし、よし、万事呑みこんだよ。」

父は浮かない顔をしながら、その癖じょうだん 談だんのようにこんな事を云つた。姉は去年縁づく時、父に分けて貰う筈はずだつた物が、未いまだに一部は約束だけで、事実上お流れになつていらしい。——そう云う消しょうそく息そくに通じている洋一は、わざと長火鉢には遠い所に、默もくねん然ねんと新聞をひろげたまま、さつき田村たむらに誘われた明治座の広告を眺めていた。

「それだからお父さんは嫌になつてしまう。」

「お前よりおれの方が嫌になつてしまう。お母さんはああやって寝ているし、お前にや愚ぐ痴ちばかりこぼされるし、——」

洋一は父の言葉を聞くと、我知らず襖ふすま一つ向うの、病室の動静に耳を澄ませた。そこで

はお律^{りつ}がいつもに似合わず、時々ながら苦しそうな唸^{うな}り声を洩^もらしているらしかった。

「お母さんも今日は楽じゃないな。」

独り言のような洋一の言葉は、一瞬間彼等親子の会話を途切^{とぎ}らせるだけの力があつた。が、お絹はすぐに居ずまいを直すと、ちらりと賢造の顔を睨^{にら}みながら、

「お母さんの病気だつてそうじゃないの？　いつか私がそう云つた時に、御医者様を取り換えていさえすりや、きつとこんな事にやなりやしないわ。それをお父さんがまた煮え切らないで、——」と、感傷的に父を責め始めた。

「だからさ、だから今日は谷村^{たにむら}博士^{はかせ}に来て貰うと云っているんじゃないか？」

賢造はどうとう苦^{にが}い顔をして、抛^{ほう}り出すようにこう云つた。洋一も姉の剛^{ごう}情^{じよう}なのが、さすがに少し面^{つら}憎^{にく}くもなつた。

「谷村さんは何時頃来てくれるんでしょう？」

「三時頃来るつて云つていた。さつき工場^{こうば}の方からも電話をかけて置いたんだが、——」

「もう三時過ぎ、——四時五分前だかな。」

洋一は立て膝^だを抱^だきながら、日曆^{ひこよみ}の上に懸^かっている、大きな柱時計へ眼を挙げた。

「もう一度電話でもかけさせましょうか？」

「さつきも叔母さんがかけたってそう云っていたがね。」

「さつきって?」

「戸沢とさわさんが帰るとすぐだとさ。」

彼等がそんな話を話している内に、お絹はまだ顔を曇らせたまま、急に長火鉢の前から立上ると、さつきと次の間まへはいって行つた。

「やつと姉さんから御暇おいとまが出た。」

賢造は苦笑くしやうを洩くらしながら、始めて腰の煙草たばこ入れを抜いた。が、洋一はまた時計を見たぎり、何ともそれには答えなかつた。

病室からは相不あいかわらず変、お律の唸うなり声が聞えて来た。それが気のせいかさつきよりは、だんだん高くなるようでもあつた。谷村博士はどうしたのだろう? もつとも向うの身になつて見れば、母一人が患者かんじやではなし、今頃はまだ便々べんべんと、回診かいしんか何かをしているかも知れない。いや、もう四時を打つ所だから、いくら遅くなつたにしても、病院はどうに出ている筈だ。事によると今にも店さきへ、――

「どうです?」

洋一は陰気な想像から、父の声と一しよに解放された。見ると襖ふすまの明いた所に、心配そ

うな浅川あさかわの叔母おばが、いつか顔のぞだけ覗かせていた。

「よつほど苦しいようですがね、——御医者様はまだ見えませんかしら。」

賢造は口を開く前に、まずそうに刻きざみの煙を吐いた。

「困つたな。——もう一度電話でもかけさせましょうか？」

「そうですね、一時しの凌しのぎさえつけて頂けりや、戸沢さんでも好いんですがね。」

「僕がかけて来ます。」

洋一はすぐに立ち上った。

「そうか。じゃ先生はもう御出かけになりましたでしょうかってね。番号は小石川こいしかわの×

××番だから、——」

賢造の言葉が終わらない内に、洋一はもう茶の間まから、台所の板の間まへ飛び出していた。

台所には櫛たすきがけの松が鰹かつお節ぶしの鉋かんを鳴らしている。——その側を乱暴に通りぬけながら、いきなり店へ行こうとすると、出合がしい頭ちうに向うからも、小走りに美津みつが走って来た。二人はまともにぶつかる所を、やっと両方へ身を躲かわした。

「御免下さいまし。」

結ゆいたての髪を勻にわせた美津は、極きり悪まそうにこう云ったまま、ばたばた茶の間の方へ

駈けて行つた。

洋一は妙にてれながら、電話の受話器を耳へ当てた。するとまだ交換手が出ない内に、帳場机にいた神^{かみやま}山^{うしろ}が、後から彼へ声をかけた。

「洋一さん。谷村病院ですか？」

「ああ、谷村病院。」

彼は受話器を持ったなり、神山の方を振り返つた。神山は彼の方を見ずに、金^{かね}格^{ごう}子^しで囲^{かこ}つた本立てへ、大きな簿記帳を戻していた。

「じゃ今向うからかかつて来ましたぜ。お美津さんが奥へそう云いに行つた筈です。」

「何てかかつて来たの？」

「先生はただ今御出かけになつたつて云つてたようですが、——ただ今だね？　良さん。」
呼びかけられた店員の一人は、ちょうど踏台の上にのりながら、高い棚^{たな}に積んだ商品の箱を取り下そうとしている所だつた。

「ただ今じゃありませんよ。もうそちらへいらつしやる時分だつて云つていましたよ。」
「そうか。そんなら美津のやつ、そう云えば好いのに。」

洋一は電話を切つてから、もう一度茶の間へ引き返そうとした。が、ふと店の時計を見

ると、不審^{ふしん}そうにそこへ立ち止った。

「おや、この時計は二十分過ぎだ。」

「何、こりや十分ばかり進んでいますよ。まだ四時十分過ぎくらいなものでしょう。」

神山は体を^{ねじ}りながら、帯の金時計を覗いて見た。

「そうです。ちょうど十分過ぎ。」

「じややつぱり奥の時計が遅れているんだ。それにしちや谷村さんは遅すぎるな。——」

洋一はちよいとためらった後^{のち}、大股^{おおまた}に店さきへ出かけて行くと、もう薄日^{うすび}もささなく

なった、もの静な往来を眺めまわした。

「来そうもないな。まさか家^{うち}がわからないんでもなからうけれど、——じや神山さん、僕はちよいとそこいらへ行つて見て来らあ。」

彼は肩越しに神山へ、こう言葉をかけながら、店員の誰かが脱ぎ捨てた板草履^{いたぞうり}の上へ飛び下りた。そうしてほとんど走るように、市街自動車や電車が通る大通りの方へ歩いて行つた。

大通りは彼の店の前から、半町も行かない所にあつた。その角^{かど}にある店蔵^{みせぐら}が、半分は小さな郵便局に、半分は唐物屋^{とうぶつや}になつてゐる。——その唐物屋の飾り窓には、麦藁^{むぎわら}

帽ぼうや籐とうの杖が奇抜な組合せを見せた間に、もう派手はでな海水着が人間のように突立はつていた。

洋一は唐物屋の前まで来ると、飾り窓を後うしろに佇たたずみながら、大通りを通る人や車に、苛立いらだたしい視線を配くばり始めた。が、しばらくそうしていても、この問屋とんやばかり並んだ横町よこちようには、人力車じんりきしゃ一台曲らなかつた。たまに自動車 came と思えば、それは空車あきぐるまの札を出した、泥にまみれているタクシイだつた。

その内に彼の店の方から、まだ十四五歳の店員が一人、自転車に乗って走って来た。それが洋一の姿を見ると、電柱に片手をかけながら、器用に彼の側へ自転車を止めた。そうしてペダルに足をかけたまま、

「今田村さんから電話がかかつて来ました。」と云つた。

「何か用だつたかい？」

洋一はそう云う間でも、絶えず賑にぎやかな大通りへ眼をやる事を忘れなかつた。

「用は別にないんだそうで、——」

「お前はそれを云いに来たの？」

「いいえ、私はこれから工場まで行つて来るんです。——ああ、それから旦那が洋一さん

に用があるって云っていましたぜ。」

「お父さんが？」

洋一はこう云いかけたが、ふと向うを眺めたと思うと、突然相手も忘れたように、飾り窓の前を飛び出した。人通りも疎な往来には、ちょうど今一台の人力車が、大通りをこちらへ切れようとしている。——その楫棒の先へ立つが早いか、彼は両手を挙げないばかりに、車上の青年へ声をかけた。

「兄さん！」

車夫は体を後に反らせて、際どく車の走りを止めた。車の上には慎太郎が、高等学校の夏服に白い筋の制帽をかぶったまま、膝に挟んだトランクを骨太な両手に抑えていた。

「やあ。」

兄は眉一つ動かさずに、洋一の顔を見下した。

「お母さんはどうした？」

洋一は兄を見上ながら、体中の血が生き生きと、急に両頬へ上るのを感じた。

「この二三日悪くってね。——十二指腸の潰瘍なんだそうだ。」

「そうか。そりゃ——」

慎太郎はやはり冷然と、それ以上何も云わなかった。が、その母譲りの眼の中には、洋一が予期していなかった、とは云え無意識に求めていたある表情が閃いていた。洋一は兄の表情に愉快な当惑を感じながら、口早に切れ切れな言葉を続けた。

「今日は一番苦しうだけれど、——でも兄さんが帰って来て好かった。——まあ早く行くといいや。」

車夫は慎太郎の合図と一しよに、また勢いよく走り始めた。慎太郎はその時まざまざと、今朝上りの三等客車に腰を落着けた彼自身が、頭のどこかに映るような気がした。それは隣に腰をかけた、血色の好い田舎娘の肩を肩に感じながら、母の死目に会うよりは、むしろ死んだ後に行った方が、悲しみが少いかも知れないなどと思いつづけている彼だった。しかも眼だけはその間も、レクラム版のゲエテの詩集へぼんやり落している彼だった。……

「兄さん。試験はまだ始らなかった？」

慎太郎は体を斜にして、驚いた視線を声の方へ投げた。するとそこには洋一が、板草履を土に鳴らしながら、車とすれすれに走っていた。

「明日からだ。お前は、——あすこにお前は何をしていたんだ？」

「今日は谷村博士が来るんでね、あんまり来ようが遅いから、立って待っていたんだだけ

ど、——」

洋一はこう答えながら、かすかに息をはずませていた。慎太郎は弟を劬^{いた}りたかった。が、その心もちは口を出ると、いつか平凡な言葉に変つていた。

「よつぽど待ったかい？」

「十分も待ったかしら？」

「誰かあすこに店の者がいたようじゃないか？——おい、そこだ。」

車夫は五六歩行き過ぎてから、大廻しに楯^{かじぼう}棒を店の前へ下^{おろ}した。さすがに慎太郎にもなつかしい、分厚な硝子^{ガラス}戸の立つた店の前へ。

四

一時間の後^{のち}店の二階には、谷村^{たにむらはかせ}博士を中心^{りつ}に、賢造^{けんぞう}、慎太郎^{しんたろう}、お絹^{きぬ}の夫の三人が浮かない顔を揃えていた。彼等はお律^{りつ}の診察が終つてから、その診察の結果を聞くために、博士をこの二階に招じたのだつた。体格の逞^{たくま}しい谷村博士は、すすめられた茶^{すず}を啜^{のち}つた後、しばらくは胴衣^{チヨッキ}の金鎖^{きんぐさり}を太い指にからめていたが、やがて電燈に照らされた三人の

顔を見廻すと、

「戸沢さんとか云う、——かかりつけの医者には御呼び下すったでしような。」と云った。
「ただ今電話をかけさせました。——すぐに上るとおっしゃったね。」

賢造は念を押すように、慎太郎の方を振り返った。慎太郎はまだ制服を着たまま、博士と向い合つた父の隣りに、窮屈きゆうくつ そうな膝ひざを重ねていた。

「ええ、すぐに見えるそうです。」

「じゃその方かたが見えてからにしましょう。——どうもはつきりしない天気ですな。」

谷村博士はこう云いながら、マロック革の巻煙草入れを出した。

「当年は梅雨つゆが長いようです。」

「とにかく雲行きが悪いんで弱りますな。天候も財界も昨今のようじゃ、——」

お絹の夫も横合いから、滑かな言葉をつけ加えた。ちやうど見舞いに来合せていた、この若い呉服屋ごふくやの主人は、短い口髭くちひげに縁無しふちの眼鏡めがねと云う、むしろ弁護士か会社員にふさわしい服装の持ち主だった。慎太郎はこう云う彼等の会話に、妙な齒痒はがゆさを感じながら、剛情に一人黙っていた。

しかし戸沢と云う出入りの医者いしやが、彼等の間に交つたのは、それから間まもない後の事だ

った。黒^{くろ}緋の羽織をひっかけた、多少は酒気もあるらしい彼は、谷村博士と慇^{いんぎん}懃^{けん}な初対面の挨拶をすませてから、すじかに坐った賢造へ、

「もう御診断は御伺いになったんですか？」と、強い東北訛^{なまり}の声をかけた。

「いや、あなたが御見えになってから、申し上げようと思っていたんですが、――」

谷村博士は指の間に短い巻煙草を挟んだまま、賢造の代りに返事をした。

「なおあなたの御話を承る必要もあるものですから、――」

戸沢は博士に問われる通り、ここ一週間ばかりのお律の容^{よう}態^{たい}を可成^{かなり}詳細に説明した。慎太郎には薄い博士の眉^{まゆ}が、戸沢の処^{しよ}方^{ほう}を聞いた時、かすかに動いたのが気がかりだった。

しかしその話が一段落つくと、谷村博士は大^{おお}様^{よう}に、二三度独^うり^{なず}領^ういて見せた。

「いや、よくわかりました。無論十二指腸の潰^{かい}瘍^{よう}です。が、ただいま拝見した所じや、腹膜炎を起していますな。何しろこ^{した}う^{はら}下腹が押し上げられるように痛いと言うんですから――」

「ははあ、下腹が押し上げられるように痛い？」

戸沢はセルの袴^{はかま}の上に威^いかつい肘^{ひじ}を張りながら、ちよいと首を傾けた。

しばらくは誰も息を呑んだように、口を開こうとするものがなかった。

「熱なぞはそれでも昨日^{きのう}よりは、ずっと低いようですが、——」

その内にやつと賢造は、覺束ない反問の口を切った。しかし博士は巻煙草を捨てると、無造作^{むぞうさ}にその言葉^{ことば}を遮^{さへぎ}った。

「それがいかんですな。熱はずんずん^{さが}下りながら、脈搏^{みくはく}は反^{かえ}つてふえて来る。——と云うのがこの病の癖なんですから。」

「なるほど、そう云うものですか。こりや我々若いものも、伺^{うかが}つて置いて好^いい事ですな。」

お絹の夫は腕組みをした手に、時々口髭^{くちひげ}をひっぱっていた。慎太郎は義兄の言葉の中に、他人らしい無関心の冷たさを感じた。

「しかし私が診察した時にや、まだ別に腹膜炎などの兆^{ちようこう}候^{こう}も見えないようでしたがな。

——

戸沢がこう云いかけると、谷村博士は職業的に、透^すかさず愛想^{あいそ}の好い返事をした。

「そうでしょう。多分はあなたの御覧になった後^{あと}で発^はしたかと思うんです。第一まだ病状が、それほど昂進してもいないようですから、——しかしともかくも現在は、腹膜炎に違

「ありませんな。」

「じゃすぐに入院でも、させて見ちやいかがでしょう？」

慎太郎は険しい顔をしたまま、始めて話に口を挟んだ。博士はそれが意外だったように、ちらりと重そうな眶の下から、慎太郎の顔へ眼を注いだ。

「今はとても動かせないです。まず差当りは出来る限り、腹を温める一方ですな。それでも痛みが強いようなら、戸沢さんをお願いして、注射でもして頂くとか、——今夜はただ中々痛むでしょう。どの病気でも楽じゃないが、この病気は殊に苦しいですから。」

谷村博士はそう云ったぎり、沈んだ眼を畳へやっていたが、ふと思ひ出したように、ヨツキ 胸衣の時計を出して見ると、

「じや私はもう御暇します。」と、すぐに背広の腰を擡げた。

慎太郎は父や義兄と一しよに、博士に來診の礼を述べた。が、その間も失望の色が彼自身の顔には歴々と現れている事を意識していた。

「どうか博士もまた二三日中に、もう一度御診察を願いたいもので、——」

戸沢は挨拶をすませてから、こう云つてまた頭を下げた。

「ええ、上る事はいつでも上りますが、——」

これが博士の最後の言葉だった。慎太郎は誰よりずっと後に、暗い梯子を下りながら、しみじみ万事休すと云う心もちを抱かずにはいられなかった。……………

五

戸沢やお絹の夫が帰ってから、和服に着換えた慎太郎は、浅川の叔母や洋一としよに、茶の間の長火鉢を囲んでいた。襖の向うからは不相変、お律の唸り声が聞えて来た。彼等三人は電燈の下に、はずまない会話を続けながら、ややもすると云い合せたように、その声へ耳を傾けている彼等自身を見出すのだった。

「いけないねえ。ああ始終苦しくつちや、——」

叔母は火箸を握ったまま、ぼんやりどこかへ眼を据えていた。

「戸沢さんは大丈夫だつて云つたの？」

洋一は叔母には答えずに、E・C・Cを啣えている兄の方へ言葉をかけた。

「二三日は間違いあるまいって云つた。」

「怪しいな。戸沢さんの云う事じや——」

今度は慎太郎が返事せずに、煙草たばこの灰を火鉢へ落していた。

「慎ちゃん。さつきお前が帰って来た時、お母さんは何とか云ったかえ？」

「何とも云いませんでした。」

「でも笑ったね。」

洋一は横から覗くのぞように、静な兄の顔を眺めた。

「うん、——それよりもお母さんの側へ行くと、莫迦ばかに好い匂においがあるじゃありませんか？」

叔母は答を促すように、微笑した眼を洋一へ向けた。

「ありやさつきお絹ちゃんが、持って来た香水こうすいを撒まいたんだよ。洋ちゃん。何とか云つ

たね？ あの香水は。」

「何ですか、——多分床撒とこまき香水とか何んとか云うんでしょう。」

そこへお絹が襖の陰から、そつと病人のような顔を出した。

「お父さんはいなくって？」

「店に御出でだよ。何か用かえ？」

「ええ、お母さんが、ちよいと、——」

洋一はお絹がそう云うと同時に、早速長火鉢さつそくの前から立ち上った。

「僕がそう云つて来る。」

彼が茶の間から出て行くと、米^{こめ}噛^かみに即^{そつ}効^{こう}紙^しを貼^はつたお絹は、両袖に胸^だを抱^だいたまま、忍^{しの}び足^{あし}にこちらへはいつて来た。そうして洋一の立つた跡へ、薄^{うす}ら寒^さそうにちゃんと坐^まつた。

「どうだえ？」

「やつぱり薬が通らなくつてね。——でも今度の看護婦になつてからは、年をとつてゐるだけでも氣丈夫ですわ。」

「熱は？」

慎太郎は口^{くち}を挟^{はさ}みながら、まずそうに煙草の煙を吐いた。

「今^は計^かつたら七度二分——」

お絹は襟^{あし}に頸^{うず}を埋^{うず}めたなり、考^{かん}え深^{ふか}そうに慎太郎を見た。

「戸沢さんがいた時より、また一分^{いちぶ}下^{くだ}つたんだわね。」

三人はしばらく黙^{もく}つていた。するとそのひっそりした中に、板^まの間^まを踏^ふむ音がしたと思^{おも}うと、洋一^{うち}をさきに賢造^{けんぞう}が、そわそわ店から歸^{かへ}つて来た。

「今^{いま}お前^{まへ}の家^{うち}から電話^{でんわ}がかかつたよ。のちほどどうかお上^{かみ}さんに御電話^{ごでんわ}を願^{ねが}いますつて。」

賢造はお絹にそう云ったがり、すぐに隣りへはいって行つた。

「しようがないわね。家じや女中が二人いたつて、ちつとも役にや立たないんですよ。」

お絹はちよいと舌打ちをしながら、浅川の叔母と顔を見合せた。

「この節の女中はね。——私の所なんでも女中はいるだけ、反つて世話が焼けるくらいなんだよ。」

二人がこんな話をしている間に、慎太郎は金口を啣えながら、寂しそうな洋一の相手をしていた。

「受験準備はしているかい？」

「している。——だけど今年は投^{ことし}げているんだ。」

「また歌ばかり作っているんだろう。」

洋一はいやな顔をして、自分も巻^{まきたばこ}煙草へ火を移した。

「僕は兄さんのように受験向きな人間じゃないんだからな。数学は大嫌いだし、——」

「嫌いだつてやらなけりや、——」

慎太郎がこう云いかけると、いつか襖^{ふすま}際^{まぎわ}へ来た看護婦と、小声に話していた叔母が、
「慎ちゃん。お母さんが呼んでいるとき。」と火鉢越しに彼へ声をかけた。

彼は吸いさしの煙草を捨てると、無言のまま立ち上った。そうして看護婦を押しつけるように、ずかずか隣の座敷へはいって行つた。

「こつちへ御出で。何かお母さんが用があるつて云うから。」

枕もとに独り坐つていた父は顫で彼に差図あじをした。彼はその差図通り、すぐに母の鼻の先へ坐つた。

「何か用？」

母は括り枕くくの上へ、櫛巻くしまきの頭を横にしていた。その顔が巾きれをかけた電燈の光に、さつきよりも一層窶やつれて見えた。

「ああ、洋一がね、どうも勉強をしないようだからね、——お前からもよくそう云つてね、——お前の云う事は聞く子だから、——」

「ええ、よく云つて置きます。実は今もその話をしていたんです。」

慎太郎はいつもよりも大きい声で返事をした。

「そうかい。じゃ忘れないでね、——私も昨日あたりまでは、死ぬのかと思つていたらけれど、——」

母は腹痛をこらえながら、齒齦はぐきの見える微笑をした。

「帝たいしやくさま 釈しやく様の御符ごふを頂いたせいか、今日は熱も下ったしね、この分で行けば癒なおりそうだから、——美津みつの叔父おじさんとか云う人も、やっぱり十二指腸じふにさしちゆうの潰瘍かいようだったけれど、半月

ばかりで癒ったと云うしね、そう難病でもなさそうだからね。——」
 慎太郎は今になってさえ、そんな事を頼みにしている母が、浅間あさましい気がしてならなかった。

「癒りますとも。大丈夫癒りますからね、よく薬を飲むですよ。」
 母はかすかに頷うなずいた。

「じやただ今一つ召し上つて御覧なさいまし。」

枕もとに来ていた看護婦は器用にお律くちびるの唇みずぐすりへ水薬みずぐすりの硝子管ガラスくだを当てがった。母は眼をつぶったなり、二ふたすい吸くたほど管くだの薬を飲んだ。それが刹那の間ながら、慎太郎の心を明くした。

「好いいい塩梅あんばいですね。」

「今度はおさまったようでございます。」

看護婦と慎太郎とは、親しみのある視線を交換した。

「薬がおさまるようになれば、もうしめたものだ。だがちつとは長びくだろうし、床とこあ上げ

の時は暑かろうな。こいつは一つ赤飯せきはんの代りに、氷あずきでも配くばる事にするか。」

賢造の冗談をきっかけに、慎太郎は膝をついたまま、そっと母の側を引き下さがろうとした。すると母は彼の顔へ、突然不審そうな眼をやりながら、

「演説えんぜつ？ どこに今夜演説があるの？」と云った。

彼はさすがにぎよつとして、救いを請うように父の方を見た。

「演説なんぞありやしないよ。どこにもそんな物はないんだからね、今夜はゆっくり寝た方が好いよ。」

賢造はお律をなだめると同時に、ちらりと慎太郎の方へ眼くばせをした。慎太郎は早速膝を擡もたげて、明るい電燈に照らされた、隣の茶の間へ帰つて来た。

茶の間にはやはり姉や洋一が、叔母とひそひそ話していた。それが彼の姿を見ると、皆一度に顔を挙げながら、何か病室の消しょう息そくを尋ねるような表情をした。が、慎太郎は口を噤つぐんだなり、不相変冷やかな眼つきをして、もとの座蒲団ざぶとんの上にあぐらをかいた。

「何の用だつて？」

まっさきに沈黙を破つたのは、今も襟に顎あごを埋めた、顔かお色いろの好くないお絹だった。
「何でもなかった。」

「じやきつとお母さんは、慎ちゃんの顔がただ見たかったのよ。」

慎太郎は姉の言葉の中に、意地の悪い調子を感じた。が、ちよいと苦笑したぎり、何ともそれには答えなかった。

「洋ちゃん。お前今夜夜伽よとぎをおしかえ？」

しばらく無言が続いた後、浅川の叔母は欠伸あくびまじりに、こう洋一へ声をかけた。

「ええ、——姉さんも今夜はするって云うから、——」

「慎ちゃんは？」

お絹は薄い眶まぶたを挙げて、じろりと慎太郎の顔を眺めた。

「僕はどうでも好い。」

「不相あいかわらず変慎ちゃんには煮え切らないのね。高等学校へでもはいつたら、もつとはきはきするかと思つたけれど。——」

「この人はお前、疲れているじやないか？」

叔母は半ばたしなめるように、癩かんだか高いお絹の言葉を制した。

「今夜は一番さきへ寝かした方が好いやね。何も夜伽よとぎぎをするからって、今夜に限った事じやあるまいし、——」

「じや一番さきに寝るかな。」

慎太郎はまた弟のE・C・Cに火をつけた。垂死すいしの母を見て来た癖に、もう内心ははしやいでいる彼自身の軽薄を憎みながら、………

六

それでも店の二階の蒲団ふとんに、慎太郎しんたろうが体を横たえたのは、その夜の十二時近くだった。彼は叔母の言葉通り、實際旅疲れを感じていた。が、いよいよ電燈を消して見ると、何度か寝反りねがえを繰り返しても、容易に睡氣ねむけを催さなかった。

彼の隣には父の賢造けんぞうが、静かな寢息ねいきを洩らしていた。父と一つ部屋に眠るのは、少くともこの三四年以来、今夜が彼には始めてだった。父は躰いびきをかかなかったかしら、—— 慎太郎は時々眼を明いては、父の寝姿を透すかして見ながら、そんな事さえ不審に思いなぞした。

しかし彼の眊まぶたの裏には、やはりさまざまな母の記憶が、乱雑に漂って来勝ちだった。その中には嬉しい記憶もあれば、むしろ忌いましい記憶もあった。が、どの記憶も今となって

見れば、同じように寂しかった。「みんなもう過ぎ去った事だ。善くつても悪くつても仕方がない。」——慎太郎はそう思いながら、糊のりの勻おいのする括くくり枕まくらに、ぼんやり五分刈ごぶがりの頭を落着けていた。

——まだ小学校にいた時分、父がある日慎太郎に、新しい帽子ぼうしを買って来た事があつた。それは兼ね兼ね彼が欲しがっていた、底ひきしの長い大黒帽だいこくぼうだつた。するとそれを見た姉のお絹きぬが、来月は長唄のお浚さらいがあるから、今度は自分にも着物を一つ、拵こしらえてくれると云い出した。父はにやにや笑つたぎり、全然その言葉に取り合わなかつた。姉はすぐに怒り出した。そうして父に背を向けたまま、口惜おかししように毒どく口ぐちを利きいた。

「たんと慎ちゃんばかり御可愛おかわいがりなさいよ。」

父は多少持て余しながらも、まだ薄笑うしろめいを止めなかつた。

「着物と帽子とが一つになるものかな。」

「じゃお母さんはどうしたんです？ お母さんだつてこの間は、羽織を一つ拵こしらえたじゃありませんか？」

姉は父の方へ向き直ると、突然険しい目つきを見せた。

「あの時はお前も簪かんざしだの櫛くしだの買つて貰つたじゃないか？」

「ええ、買つて貰いました。買つて貰つちやいけないんですか？」

姉は頭へ手をやったと思うと、白い菊の花はな簪かんざしをいきなり畳の上へ抛ほうり出した。

「何だ、こんな簪ぐらい。」

父もさすがに苦い顔をした。

「莫迦ばかな事をするな。」

「どうせ私は莫迦ですよ。慎ちゃんのような利口じゃありません。私のお母さんは莫迦だつたんですから、——」

慎太郎は蒼い顔あおをしたまま、このいさかいを眺めていた。が、姉がこう泣き声を張り上げると、彼は黙つて畳の上の花簪を掴つかむが早いか、びりびりその花びらをむしり始めた。

「何をするのよ。慎ちゃん。」

姉はほとんど気違いのように、彼の手もとへむしやぶりついた。

「こんな簪なんぞ入らないつて云つたじゃないか？ 入らなけりやどうしたつてかまわないじゃないか？ 何だい、女の癖に、——喧嘩ならいつでも向つて来い。——」

いつか泣いていた慎太郎は、菊の花びらが皆なくなるまで、剛情に姉と一本の花簪を奪い合つた。しかし頭のどこかには、実母のない姉の心もちが不思議なくらい鮮あざやかに映つてい

るような気がしながら。――

慎太郎はふと耳を澄すませた。誰かが音のしないように、暗い梯子はしごを上あがつて来る。――と思うと美津みつが上り口から、そつとこちらへ声をかけた。

「旦那様」

眠っていると思つた賢造は、すぐに枕から頭を擡もたげた。

「何だい？」

「お上かみさんが何か御用でございます。」

美津の声は震えていた。

「よし、今行く。」

父が二階を下りて行つた後のち、慎太郎は大きな眼を明いたまま、家いえ中の物音にでも聞き入るように、じつと体を硬こわばらせていた。すると何故なぜかその間に、現在の気もちとは縁の遠い、こう云う平和な思い出が、はつきり頭へ浮んで来た。

――これもまだ小学校にいた時分、彼は一人母につれられて、谷中やなかの墓地へ墓参りに行った。墓地の松や生垣いけがきの中には、辛夷こぶしの花が白らんでいる、天氣の好い日曜ひるの午過ぎだった。母は小さな墓の前に来ると、これがお父さんの御墓だと教えた。が、彼はその前に

立つて、ちよいと御時宜おじぎをただけだった。

「それでもう好いの？」

母は水を手向けたむながら、彼の方へ微笑を送った。

「うん。」

彼は顔を知らない父に、漠然とした親しみを感じていた。が、この憐あわれな石塔には、何の感情も起らないのだった。

母はそれから墓の前に、しばらく手を合せていた。するとどこかその近所に、空気銃を打ったらしい音が聞えた。慎太郎は母を後に残して、音のした方へ出かけて行つた。生いけが垣きを一つ大廻りに廻ると、路幅の狭い往来へ出る、——そこに彼よりも大きな子供が弟らしい二人と一しよに、空気銃を片手に下げたなり、何の木か木の芽の煙こずえった梢のこりを残惜いけがしそうに見上げていた。——

その時また彼の耳には、誰かの梯子はしごを上つて来る音がみしりみしり聞え出した。急に不安になった彼は半ば床とこから身を起すと、

「誰？」と上り口へ声をかけた。

「起きていたのか？」

声の持ち主は賢造だった。

「どうかしたんですか？」

「今お母さんが用だつて云うからね、ちよいと下へ行つて来たんだ。」

父は沈んだ声を出しながら、もとの蒲団ふとんの上へ横になった。

「用つて、悪いんじゃないんですか？」

「何、用つて云つた所が、ただ明日工場あしたこうばへ行くんなら、箆たんすの上の抽斗ひきだしに単衣物ひとえものがあるつて云うだけなんだ。」

慎太郎は母を憐んだ。それは母と云うよりも母の中の妻を憐んだのだった。

「しかしどうもむずかしいね。今なんでも行つて見ると、やっぱり随分苦しいらしいよ。おまけに頭も痛いとか云つてね、始終首を動かしているんだ。」

「戸沢さんにまた注射でもして貰つちやどうでしょう？」

「注射はそう度々は出来ないんだそうだから、——どうせいけなけりやいけないまでも、苦しみだけはもう少し楽にしてやりたいと思うがね。」

賢造はじつと暗い中に、慎太郎の顔を眺めるらしかった。

「お前のお母さんなんぞは後生ごしょうも好い方だし、——どうしてああ苦しむかね。」

二人はしばらく黙っていた。

「みんなまだ起きていますか？」

慎太郎は父と向き合つたまま、黙っているのが苦しくなつた。

「叔母さんは寝ている。が、寝られるかどうかだ、――」

父はこう云いかけると、急にまた枕から頭を擡もたげて、耳を澄ますようなけはいをさせた。

「お父さん。お母さんがちよいと、――」

今度は梯子はしごの中段から、お絹きぬが忍びやかに声をかけた。

「今行くよ。」

「僕も起きます。」

慎太郎は掻巻かいまきを刎はねのけた。

「お前は起きなくともいいよ。何かありやすぐに呼びに来るから。」

父はさっさとお絹の後から、もう一度梯子を下りて行つた。

慎太郎は床の上に、しばらくあぐらをかいていたが、やがて立ち上つて電燈をともした。それからまた坐つたまま、電燈の眩しい光の中に、茫然とあたりを眺め廻した。母が父を呼びによこすのは、用があるなしに關らず、実はただ父に床の側へ来ていて貰いたいせ

いかも知れない。——そんな事もふと思われるのだった。

すると字を書いた罫紙けいしが一枚、机の下に落ちていたのが偶然彼の眼を捉えた。彼は何気なにげなくそれを取り上げた。

「M子に献ず。……」

後は洋一の歌になっていた。

慎太郎はその罫紙けいしを抛ほうり出すと、両手を頭の後うしろに廻しながら、蒲団の上へ仰向けあおむになった。そうして一瞬間、眼の涼しい美津の顔をありあり思い浮べた。……………

七

慎太郎しんたろうがふと眼をさますと、もう窓の戸の隙間も薄白くなった二階には、姉のお絹きぬと賢造けんぞうとが何か小声に話していた。彼はすぐに飛び起きた。

「よし、よし、じゃお前は寝た方が好いよ。」

賢造はお絹にこう云ったなり、忙いそしそうに梯子はしごを下りて行つた。

窓の外では屋根瓦に、滝の落ちるような音がしていた。大降りおおぶだな、——慎太郎はそう

思いながら、早速寝間着を着換えにかかった。すると帯を解いていたお絹が、やや皮肉に彼へ声をかけた。

「慎ちゃん。お早う。」

「お早う、お母さんは？」

「昨夜はずっと苦しみ通し。——」

「寝られないの？」

「自分じやよく寝たつて云うんだけど、何だか側で見ていたんじや、五分もほんとうに寝なかつたようだわ。そうしちや妙な事云つて、——私夜中に気味が悪くなつてしまつた。」

もう着換えのすんだ慎太郎は、梯子の上り口に佇んでいた。そこから見える台所のさきには、美津が裾を端折つたまま、雑巾か何かかけている。——それが彼等の話し声がすると、急に端折つていた裾を下した。彼は真鍮の手すりへ手をやったなり、何だかそこへ下りて行くのが憚られるような心もちがした。

「妙な事つてどんな事を？」

「半ダアス？ 半ダアスは六枚じやないかなんて。」

「頭が少しどうかしているんだね。——今は？」

「今は戸沢さんとさわが来ているわ。」

「早いな。」

慎太郎は美津がいなくなつてから、ゆつくり梯子を下りて行つた。

五分の後のち、彼が病室へ来て見ると、戸沢はちようどジキタミンの注射をすませた所だつた。母は枕もとの看護婦に、後あとの手当をして貰いながら、昨夜父ゆうべが云つた通り、絶えず白い括り枕くくの上に、櫛巻くしまきの頭を動かしていた。

「慎太郎が来たよ。」

戸沢の側に坐つていた父は声高こわだかに母へそう云つてから、彼にちよいと目くばせをした。彼は父とは反対に、戸沢の向う側へ腰を下した。そこには洋一よういちが腕組みをしたまま、ぼんやり母の顔を見守つていた。

「手を握つておやり。」

慎太郎は父の云いつけ通り、両手たなごころの掌に母の手を抑えた。母の手は冷たい脂汗あぶらあせに、気味悪くじつとり沾しめつていた。

母は彼の顔を見ると、頷うなずくような眼を見せたが、すぐにその眼を戸沢へやつて、

「先生。もういけないんでしょう。手がしびれて来たようですから。」と云った。

「いや、そんな事はありません。もう二三日の辛棒しんぼうです。」

戸沢は手を洗っていた。

「じきに楽になりますよ。——おお、いろいろな物が並んでいますな。」

母の枕もとの盆の上には、大神宮や氏神うじがみの御札おふだが、柴又しばまたの帝たい釈しゃくの御影みえいなどとしよに、並べ切れないほど並べてある。——母は上眼うわめにその盆を見ながら、喘ぐあえように切れ切れない返事をした。

「昨夜ゆうべ、あんまり、苦しかったものですから、——それでも今朝けさは、お肚なかの痛みだけは、ずつと楽になりました。——」

父は小声に看護婦へ云った。

「少し舌がつれるようですね。」

「口が御粘りねばになるんでしょう。——これで水をさし上げて下さい。」

慎太郎は看護婦の手から、水に浸ひたした筆を受け取って、二三度母の口をしめした。母は筆に舌を搦からんで、乏しい水を吸うようにした。

「じゃまた上りますからね、御心配な事はちつともありませんよ。」

戸沢は鞆^{かばん}の始末をすると、母の方へこう大声に云った。それから看護婦を見返りながら、
「じゃ十時頃にも一度、残りを注射して上げて下さい。」と云った。

看護婦は口の内でも返事をしたり、何か不服そうな顔をしていた。

慎太郎と父とは病室の外へ、戸沢の帰るのを送って行つた。次の間^まには今朝も叔母が一人気抜けがしたように坐っている、——戸沢はその前を通る時、叮^{ていねい}嚀^{ねい}な叔母の挨拶に無^む造^{ぞう}作^{さく}な目礼を返しながら、後^{あと}に従つた慎太郎へ、

「どうです？ 受験準備は。」と話しかけた。が、たちまち間違いに気がつく、不快なほど快活に笑いだした。

「こりやどうも、——弟さんだとばかり思つたもんですから、——」

慎太郎も苦笑した。

「この頃は弟さんに御眼にかかる、いつも試験の話ばかりです。やはり宅の忤^{せがれ}なんぞが受験準備をしているせいですな。——」

戸沢は台所を通り抜ける時も、やはりにやにや笑っていた。

医者が雨の中を帰つた後^{のち}、慎太郎は父を店に残して、急ぎ足に茶の間へ引き返した。茶の間には今度は叔母の側に、洋^{よう}一^{いち}が巻煙草を啣^{くわ}えていた。

「眠いだろう？」

慎太郎はしやがむように、長火鉢の縁へ膝を当てた。

「姉さんはもう寝ているぜ。お前も今の内に二階へ行つて、早く一寝入りして来いよ。」

「うん、——昨夜夜つびて煙草ばかり呑んでいたもんだから、すっかり舌が荒れてしまった。」

洋一は陰気な顔をして、まだ長い吸いさしをやけに火鉢へ抛りこんだ。

「でもお母さんが唸らなくなつたから好いや。」

「ちつとは楽になつたと見えるねえ。」

叔母は母の懷炉に入れる懷炉灰を焼きつけていた。

「四時までは苦しかったようですがね。」

そこへ松が台所から、銀杏返しいちようがえのほつれた顔を出した。

「御隠居様。旦那様がちよいと御店へ、いらして下さいっておっしゃっています。」

「はい、はい、今行きます。」

叔母は懷炉を慎太郎へ渡した。

「じゃ慎ちゃん、お前お母さんを氣をつけて上げておくれ。」

叔母がこう云つて出て行くと、洋一も欠伸^{あくび}を噛み殺しながら、やっと重い腰を擡^{もた}げた。
「僕も一寝入りして来るかな。」

慎太郎は一人になつてから、懷炉を膝に載せたまま、じつと何かを考えようとした。が、何を考えるのだから、彼自身にもはつきりしなかった。ただ凄まじい雨の音が、見えない屋根の空を満している、——それだけが頭に拡がっていた。

すると突然次の間^まから、慌^{あわただ}しく看護婦が駆けこんで来た。

「どなたかいらしつて下さいましよ。どなたか、——」

慎太郎は咄嗟^{とつさ}に身を起すと、もう次の瞬間には、隣の座敷へ飛びこんでいた。そうして逞^{たくま}しい両腕に、しっかりとお律^{りつ}を抱き上げていた。

「お母さん。お母さん。」

母は彼に抱かれたまま、二三季度^{ふる}体を震わせた。それから青黒い液体を吐いた。

「お母さん。」

誰もまだそこへ来ない何秒^{あいだ}かの間、慎太郎は大声に名を呼びながら、もう息の絶えた母の顔に、食い入るような眼を注いでいた。

(大正九年十月二十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お律と子等と

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>